



幼稚園の五月

よ
し
こ

本校へ、本校へ、とせがまるゝまゝに歩いて見たくなりぶらぶらと行く。

誰も居ない。

男の子はたゞもう駆けまはるのがうれしそう。

こゝへ來るときまづてまづ遊ぶしませうと云ひ出す女の子がある。とすぐにもう十二三人は圓形をつくり遊戯室内にあらざる遊戯が始る。次から次へとおどる。ピアノもいらぬ、先生もいらぬ。

五月の緑の明るさの中にかにも晴ればれと幼き者は躍る。よき型のエプロンの白がみどりの中にくつきりと映えた調ひを見せてゐる。

少し斜になつた芝生に先生が小型の繪本の表紙をながめてゐると目ざとく見つけ出した七八人がすぐに先生をかこんでしまふ。

こんな事で一しきり遊びがすむと幼稚園へ歸つてゆく。

この木、この草、この岡、この石段、このれんが、明るさと、親しみと、調ひとを學校中の人達になげかけてくれるこゝ本校の正門内の廣場は最もよき子供の遊び場である。こゝへ來ればたとひ先生の視野の中にあらずとも、いつも子供は困つた事やあふない事はしないので思ふ様遊んでくれるので幼きものならずともついこゝへは遊びに來たくなる。

x x x x x

幼稚園の庭に小砂利がしかれた。

ざく／＼と歩むこゝろよさ。

丸味をふくんだうす紫の藤の蕾がむく／＼と一直線の棚にもり上つてゐる。この棚の下にずつとしきのべれられたごさじにU組の七八人が座つてゐる、立つてゐる、雑巾がけをする、箒ではいてゐる、本をよんでと先生に頼んでゐる子もゐる。

小砂利の上に藤のつぼみの下に、ながむる人もながめらるゝ人も思ふ事なき幼稚園の一ときである。

x x x x x

ある日の朝。

新入園の子供のお母さんと話しました。

「今日は子供の様子を見ながらお室を拜見させていたとききました。A先生はさすがに子供のあつかひが

お上手ですね、いつもぐづ／＼云ふおさんが今日はすら／＼と何でもなさいましたよ。それはなさいとか、これをしてからでなけりや遊んではいけないなど、決しておつしやいません。おゑかきでも、おらがひでもするものはさせるし、しないものはそのまゝにして（但し入園後日の淺き組）いらつしやつたのにどうしたのか、誰もいやがらないでしまひには皆なさいましたよ」と。

A 先生はどんなに子供達が騒がうが、泣うが一緒に氣をもんだり困つたりなさる様子を見た事た事ありません。A 先生のえらさを見つけたお母さんもよいお母さんではありませんか。新入の幼児の今や涙こぼれんとする子の多い中に先生も一緒に氣をもんでゐたら誰をたよりに幼児は居るでせう。

最も進歩した理想的保育方法を知りたいと心がけてゐる一方この「子供のあつかひ」の心をうつかりしてゐる様な氣がいたします。

